



100選
第13回

鳥取県 智頭町(上)



ジャーナリスト
藤原 勇彦

みどりの風吹く林業地の試み 都市と田舎つなぐ「疎開保険」

東日本大震災の2011年が終わり、新しい年がやってくる。復興の遅れ、広がる放射線の影響、円高株安、大企業の不調、ヨーロッパの国債不安、TPP参加へ向けた協議の開始……。暮らしの先行きは、どうなるのか。新年の喜びよりは、不安の種が目にとまるが、そんな今こそ、「元氣印の田舎の出番」と、ユニークな事業を展開している地域がある。鳥取県の智頭町だ。集落の宝物を探す「日本1/0村おこし運動」や、住民のアイデアを町政に生かすための政策提言組織「百人委員会」など、地域起こしの世界では、すでに有名ブランドといってもよいが、この1、2年は、都市と農村が支えあう新たな仕組みとして、「みどりの風が吹く疎開の町」づくりを力を入れていく。智頭町の様々な挑戦を、2回に分けて紹介したい。

7日間の宿泊と3食

鳥取県の東南部、岡山県との県境に近い智頭町は、江戸時代以来の宿場町。林業で栄え、かつては鳥取県内でも裕福な

地域といわれた。町の中心部に敷地3千坪（1畝）、40もの部屋数を誇る当時の大庄屋・山林地主の石谷家住宅は、国の重要文化財に指定されている。人口は最盛期の半分近くになったが、なお8000人余を数え、約220平方メートルの総面積の93%を、ブランド種・智頭杉などの森林が占める。木材価格の低下とともに過疎化・高齢化は進んだが、平成の大合併に合わらず、林業と農業を軸に独自の町づくりを目指している。

この智頭町が、2011年から始めた新事業が、「疎開保険」。保険と名前はついているが「災害を切り口とする地域間交流、物流、商流による地域おこし」という。災害が起きた時、なにより困るのは生活場所の確保。地震や津波などで災害救助法が発令された地域の「疎開保険」加入者は、避難先として智頭町内や近隣での7日間の宿泊と3食の提供が保証される。加入金は、1人1年1万円。これでストレスのたまる避難所から、緑と癒やしの智頭町へ疎開することができ。智頭町が都市住民の「田舎の実家」になり、安全と安心を保障しようという仕組みだ。また、災害が起きなければ、秋に収穫した地元特産の米や野菜などを、加入者に贈り、地域との交流につなげる狙いだ。

宅の公開を、住んでいた当主夫婦と掛け合って実現し、全国から万を超える見学者を呼び込んだり、町内の母親の「アメリカでは自分の子と同じ年頃の子が飢えているのに日本じゃ減反でコメをつくっちゃいけない。変な国ですね」という思いをくみ取り、休耕地を利用してケニアへの食糧援助米を生産したりするなど、画期的な町の取り組みの中心人物だ。

深呼吸できるような町に

「疎開保険」の発想の原点について、寺谷町長は、「災害に限らず、都会の暮らしはストレスがたまる。わが子を床にたたきつけたり、会社員が働きすぎて疲れてうつ病になったりする前に、エスケープしてきて深呼吸できるような町が、日本に一つぐらいあってもいいじゃないかと考えた」という。

そのコンセプトに沿って、数年前から人々を受け入れるための様々な取り組みをしてきた。一定の日数、続けて森の中を歩くなどで、森林浴効果を医学的に活用する「森林セラピー」施設も、その一つだ。ガイドを養成、セラピーコースを設定し、一昨年4月には県内初の森林セラピー基地に認定された。やってくる人々のために町内から確保した数十軒の民泊先は、森林セラピー用であるとともに、疎開保険の宿泊先にもなっている。「関西から来たおじいさんがね、家で



奥さんが地元で経営する山菜料理店「みたき園」の庭に立つ寺谷誠一郎町長



出荷用のヤツガシラの茎を収穫する「智頭野菜新鮮組」のお年寄り

はいつも同じ話を繰り返すので家族から相手にされないが、ここで民泊するとちゃんと話を聞いてくれるって、リピーターになっちゃった」と寺谷町長。自然一辺倒ではない。町内には光ファイバー網を整備し、ストレスで健康を損ねた先端産業などの社員が、半日は農林業を行い、半日はパソコンを使い遠隔で仕事をする、という弾力的な環境も用意されている。現に大手IT産業が福利厚生

元気なお年寄りが主役

点から注目し、相談が来ているという。

「疎開保険」のもう一つの狙いは、「じいさんばあさんに焦点を当てる」ことだと、寺谷町長は言う。「年寄りには枯れ木だけけれど、マッチ一本で火がつく」

例えば、智頭町の緑の環境で自然と触れ合いながら子育てをする「森のようちえん まるたんぼう」。1人のお母さんの、「智頭町の森のような環境の中で子育てできたら素晴らしい」という感想を、「百人委員会」を通じて取り上げ、町や県が後押しして専門の保育士を雇い、3年前に実現した。今では、雨でも雪でも毎日20数人の園児が、町内9カ所の森のフィールドで、走り回ったり、様々な遊びをしていたりする。

この「森のようちえん」を運営するうえで、子どもたちに危険がないよう森の中の丸木橋を修理したり、そととママシを退治したり、縁の下の力持ちとして、地域のお年寄りの存在が欠かせない。「年寄り」は、米作りも野菜作りも名人だ。「疎開保険」で、加入者に贈るのは、この年寄りが丹精込めた作物。加入料をもとに、きちんとした値段で買いとるから、じいさんばあさんは小遣いになって元気が出るし、都会の人はおいしい産物で智頭町のファンになる。いまに元気な年寄りが町の名物になるから、いずれそれを見に

来てほしい」

10月半ばの朝早く、町内の福祉会館に、収穫されたばかりの米や野菜が、集まった。運び込んだのは、町の呼びかけに応募した野菜作り名人、数十人のおじいさんやおばあさん。キャベツ、ダイコン、サツマイモ、豆類、ヤツガシラやその茎。分量は、めいめいの畑で採れたなり。段ボールに詰めて、「疎開保険」の加入者に送り出す。さらに、町が仲介して、「智頭野菜新鮮組」のブランド名で神戸さとうなど関西方面に産直販売されるようにもなり、好評を博すようになっていく。出荷したその場で伝票が切られ、いい小遣いになるので、みな、えびす顔だ。

「疎開保険」は町にとつては、森林セラピー、民泊、森のようちえん、智頭野菜新鮮組などの施策を相互につなげる要の企画だ。東京で発表したのが2011年3月の初め。その直後に東日本大震災が発生したため、しばらく募集の広報を控えていた。「便乗商法」と見られたくないためだった。しかし、秋からいよいよ本格的に募集を始め、今は加入者が百数十人、近々1000人まで増やすことを目指している。申し込み・問い合わせは、〒689-1402 鳥取県智頭町大字智頭2072-1 智頭町企画課 Tel 0858-754112 FAX 0858-751193 <http://www.town.chizu.tottori.jp/>